慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第2章図書館の建設とその後の改修
Sub Title	
Author	
Publisher	学校法人慶應義塾
Publication year	2019
Jtitle	重要文化財 慶應義塾図書館保存修理工事報告書 (本編) (2019. 9) ,p.11- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12004001-00000000-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第 2 章　　図書館の建設とその後の改修

第 1 節　図書館の建設

1　建設にいたる経緯

図書館建設にいたる経緯については、『慶應義塾図書館史』に詳しい。ここでは、当書を参考に述べることとする。

明治 36 年 (1903)3 月に「専門学校令」が公布され、慶應義塾は大学と認められることとなった。当時既に大学の主要建物であった煉瓦講堂は存在していたが、これ以外に木造校舎や図書館の必要性も取り沙汰されていたようで、同年 12 月評議委員会の記録に、「書籍館ハ今日ノ儘ニテ打棄置クヘキニ非ルカ故ニ現在ノ煉瓦造家屋内ノ事務室ヲ他ニ移シ、此建物ヲ修理シテ当分仮ノ書籍館及集会室トシ、他年経済上余裕アル時ニ至リ立派ナル書籍館ヲ建築スルノ方針ヲ執ラン事ヲ勧告ス」が残る。

その後、独立の図書館建設待望の声はますます高まり、明治 39 年 (1906)3 月発行の学報に、「明年ハ慶應義創立第五十年に相当するを機とし、広く記念寄附金を募集して拾余万円を要する一大記念図書館を建設せんとて目下その計画中なり」と報じている。

明治 38 年 (1905) に図書館監督に任ぜられた田中教授は、明治 39 年 3 月に行われた全国図書館大会において、「図書館建築についての注意」と題する講演を行い、以下のように図書館建築の留意点を述べている。「図書館其者は古本を埋葬する死せる墳墓にあらずして人を教育する所の生ける一大機関なれば、其設計の如きも普通の技師に一任することなく、大に此道に精しき諸学者の説に重きを置かざるべからず」と述べ、帝国図書館が分室法を採用して防火対策を諮ったにもかかわらず、設計者と使用者との意思の疎通が諮れず完璧な防火構造とできなかったことを遺憾としている。

同年 9 月 27 日には、評議員の相談会が持たれ、5 名の図書館建設準備委員が選出され、10 月 16 日の評議委員会で可決された。そして 12 月 5 日、発起人として 130 名連名の建設趣意書が発表された。ここには、図書館の必要性が述べられていて、欧米諸国の大学が壮大な図書館施設を備えていることと、我が国のように一般閲覧者の希望を満たす公私図書館が限られる状況を憂い、大学の図書館を学生のための研究場だけでなく一般に公開して世間の公益に資する必要があると記している。趣意書は「即ち創立五十年の紀念としては圖書館の建設を適當の方法と信するを以て廣く有志家の賛助を得て金三十万圓を募集し本塾構内の適宜なる地を相し一大圖書館を新築して慶應義塾創立五十年紀念圖書館と名づけ義塾學生の研究に資すると共に世間一般の閲覧者に公開することゝ爲し建築費を支拂ふて尚ほ餘財あるときは之を圖書購入基金に充てんとするの計画なり爰に聊か義塾の經歴と圖書館の必要なる次第とを記し偏に同情有志諸君の賛助を請ふと云ふ」と言う言葉で結んでいる。

募金の応募額は、大正元年 (1926) の最終の決算では応募額 36 万余円であったが、実収は 30 万 9915 円 50 銭であり、かろうじて予定額に達していた。その後、図書館を木造にして事業費を減額し、余った寄付金で工科を拵えようといった説も出たが、12 月の評議会において、図書館建設地が決定した。敷地は三田丘上において最も眺望の良い東北隅とした。ここはもともと福沢諭吉の本宅のあった所で、それを明治 9 年 (1876) 頃東南隅に移設し、幼稚舎を建て、さらに明治 30 年 (1897) に幼稚舎を丘の下に移した後、木造寄宿舎を 3 棟建てた。この寄宿舎を約 19 間西方へ移し、図書館を新築することとした。

建築設計はこの時既に、評議員会議長であった荘田平五郎を通じて、曽禰達蔵に依頼されていたようだ。その裏付けとして、明治 40 年 (1907)10 月 17 日発行の図書館雑誌に、館員の竹内忠一が設計は曽禰博士に委託してあるといっており、11 月の評議員会で理事が設計案を説明している。曽禰達蔵が中條精一郎と曽禰中條建築事務所を三菱七号館内に開設したのが明治 41 年 (1908)1 月のことであるから、開設直前の話であった。また、図書館監督の田中教授と

曽禰博士との間には、「書庫はブール氏式に更に新案を加えたものとし、防火においては特に留意し、その他設備も資金の許す限り最新式のものを採用する」等の合意があったようだ。

明治 44 年 (1911) 11 月発行の建築雑誌の巻末附図説明[史料 6] によれば、当時曽禰中條事務所を訪れた際のインタビュー記事として、この図書館をゴシックスタイルとした理由は、慶應義塾の依頼ではなく、スケッチデザインとして 12、3 案提出したが、最後に何か変わったものをということで提出したものであったそうだ。もともとゴシックスタイルは真面目な建築、例えば寺院、学校、図書館等に適しているとも記されている。

設計着手の時期は不明であるが、明治 42 年 (1909) 2 月に曽禰中條建築事務所から慶應義塾宛てに提出された設計監督の報酬提案書[史料 3] や、当初図面に記された日付から判断すると、少なくとも明治 41 年 11 月には実施設計業務に着手していたと考えられる。

この提案書は 6 項目からなり、

ⅰ　計監督業務に対する報酬を建築実費の 3/100 とし、

ⅱ　製図・仕様書・予算書を慶應義塾に引渡した段階で 1.5/100 を受領し、建築が竣工し工費が確定した段階で精算し、

ⅲ　残りの 1.5/100 は、工事進行に応じて毎年 6 月と 12 月に受領し、工事竣工の際に精算する。

ⅳ　現場監督者は設計事務所で推薦し、報酬は慶應義塾が支払い、

ⅴ　当建築に関する附帯工事で特に建築以外の専門家用必要とする場合は、設計事務所で推薦または承認した者を嘱託とし、報酬は慶應義塾が支払い、

ⅵ　前 5 項以外に生ずる事項はその都度協議する。

等と定められていて、当時の設計監理業務の一端を知ることができ興味深い。

設計図面は、明治 41 年 11 月 10 日の時点で、地階・1 階・2 階・3 階平面図、正面図、背面図、東・西側面図が描かれていて、引き続き、翌 42 年 1 月 8 日から 1 月 20 日の間に、各断面図、各階床伏図、各階天井見上図、屋根伏図、鉄骨小屋伏、断面図、基礎伏及び地中煉瓦断面図、正面中央・書庫・北面中央切妻とフィニアルの矩計図、壁体煉瓦壁矩計図、各階段詳細図、竪樋及び排水関係図、梁及び天井詳細図、建具詳細図、附属便所及び廊下図までを完成させている。

明治 43 年 1 月、図書館内部の諸設備も同事務所に設計を委ねることとなり、図書館書棚詳細図、家具の断面・立面図、灯具詳細図、窓掛装飾詳細図等を作図している。

2　建設の経過

建設工事は、明治 41 年 (1908) 12 月 24 日に敷地の地ならしと菱矢来の建設が始まり、翌 42 年 2 月に完了した。

先に記したように、この時既に本体工事発注に必要な基本図面は大部分完成しており、入札の準備も進められていたと考えられる。また、3 月 31 日付けの設計変更関係書類[史料 4] が存在する。これには既に提出済みであった原仕様の変更項目が詳細に記されていて、まさに見積の最中であったことがわかる。

ただ、工事予算の関係から、すぐに請負業者を決定することができず、再度にわたり交渉が行われ、最終的に戸田利兵衛が落札している。明治 42 年 5 月 25 日、慶應義塾との間で、慶應義塾創立五十年紀年図書館新築工事の請負契約が交わされた。契約金額を 173,180 円 95 銭 8 厘とし、契約書に記された工期は、明治 42 年 5 月 26 日起工、明治 44 年 10 月 20 日竣工予定であった。

契約翌日の 5 月 26 日に地鎮祭が執り行われ、6 月 3 日、地下根切工事に着手することとなった。

工事工程については、慶應義塾に残る工事記録写真より知ることができる。根切工事に着手すると、まず地下部分の土砂を掘削し、布基礎部分の栗石を突き固め、捨てコンクリートを打設している。引き続き、煉瓦躯体の煉瓦積みに着手し、要所に石材を積み重ね、11 月 23 日に安礎式を挙行した。この時点で地中部分の煉瓦積みは完了していたと考えられ、正面側の 1 階基壇石積も上から 2 段目の安礎石レベルの据付けが始まっていたように見える。

未完成であった鉄骨小屋組と造作設計図も徐々に

完成し、明治 43 年 (1910)4 月 5 日に大階段詳細図が、4 月 13 日には鉄製窓建具の詳細図が出来上がり、4 月 20 日頃には鉄骨小屋組の詳細図も出揃った。

その後、壁体の煉瓦積みと外部の化粧石積みが並行して行われ、鉄梁と鉄骨柱を設置するなどして、壁体を徐々に積み上げていき、明治 44 年の初め頃までには鉄骨小屋組も組み上がったと推察される。

引き続き、床スラブと切妻部分外壁のコンクリート打ちが行われ、屋根銅板葺・スレート葺、木部造作・内装工事、建具設置が済み、明治 45 年 (1912)4 月 15 日に竣工した。

5 月 18 日に開館式が挙行された。新図書館を見上げながら登る坂の途中の正門は様々な飾りつけがされ、「開館祝典」の文字が浮き出ていた[古写真 83]。受付で案内状と引き換えに渡された記念品が、「慶應義塾創立五十年紀念図書館紀要」1 冊と記念アルバム及び絵葉書であった。式典は大閲覧室で午後 2 時から始まり、6 時には図書館屋根に飾られたイルミネーションが点灯した[古写真 87]。

3　当初の仕様および形式

(1) 当初設計図

当初設計に係わると考えられる図面[註 1]は 50 枚存在する。第壹号から第参拾号まで漢数字の番号が付された一連のものが 36 枚、家具第壹號から五號まで漢数字の番号が付されたものが 5 枚、番号が付されず図面名称のみのものが 8 枚ある。これら以外に、図面枠の形状が異なる表門設計図が 1 枚存在する。前述の通り、ほとんどの図面には日付が付されているため、図面作製の進捗状況を知ることができる。

「当初設計図他図面リスト」に記した「当初 1、2」図[註 2]は配置図であり、「当初 1」図で慶應義塾敷地と構内建物の配置を示し、「当初 2」図で新築する図書館の工事区画を示している。

「当初 3」から「当初 9」の図面で平・断・立の一般図を表している。「第壹號」に 1 階平面と地階平面を、「第貳號」に 2 階平面と 3 階平面を表す。縮尺を 1/100 とし、各図面には部屋名称と各部の平面寸法が尺貫法で記される。平面寸法は、建物外壁間の寸法、各部屋の内法寸法、開口部間口寸法が記入されている。「第参號」が正面（南側）立面図、「第四號」が東側立面図、「第五號」が背面（北側）立面図、「第六號」が西側立面図であり、縮尺 1/50 に各面の姿が描かれ、寸法の記入はない。「第七號」には、縮尺 1/100 で、東西・南北の各断面と八角塔部分と北東隅 3 階建て部分の各南北断面図が合計 4 断面描かれる。各部屋の天井高が簡単に表示されている。

「第八號」には、1 階、2 階、3 階の床伏図を縮尺 1/100 で示し、鉄梁と木梁、それに根太割りが描かれ、梁と根太の割付寸法を知ることもできる。「第九號」には、1 階、2 階、3 階の天井見上げ図が描かれる。寸法の記入はなく、天井部材の割付と形状がわかるものとなっている。「第拾號」には屋根伏図と小屋伏図が描かれる。屋根伏図は屋根窓と陸屋根の配置と銅板葺・スレート葺の範囲が示される。小屋伏図は、身舎の位置を示す他に、各鉄骨小屋組のトラス形状が描かれ、部材寸法も記されている。「第拾壹號」は、基礎伏を示すとともに、あらゆる個所で布基礎と独立基礎の断面が詳細に描かれ、コンクリート基礎の断面寸法と形状、地階床仕上の高さや納まりもわかる。また、開口部底面のインバートの形状も示されている。

「当初 14」から「当初 19」の図面には、建物の矩計が記されている。「第拾貳號」は正面中央部矩計図の上部を 1/20 で描いたもので、これとは別に下部図面も存在したはずだが、現在は欠失している。ここでは切妻壁面とフィニアルの断面、切妻部分の鉄筋コンクリート躯体の配筋とテラコッタの化粧張り形状がわかる。「第拾三號」は主に書庫の矩計を描いたもので、上部と下部の図面が存在する。上部図面は「第拾二號」と同様に妻面上部とフィニアルの矩計と断面詳細がわかる。下部図面には正面見付部分の窓配置、石配置、尖塔アーチの形状が描かれる。それに、書庫南面、北面、東面及び書庫・廊下境の壁体断面と矩計とが示され、窓・扉開口の納まりがわかる。「第拾四號」が欠落するが、これも矩計を示したものであったと考えられる[註 3]。「第拾五號」は、八角塔と背面中央部の矩計を示したもので、上部と下部の 2 図

面に分かれる。上部には他の矩計と同様に大階段北側妻面上部とフィニアルの断面詳細、八角塔上部の詳細と屋上腰壁を含めた壁体断面が描かれる。下部図面にはバットレスと窓開口回りの建具や石材の詳細が示される。「第拾六號」は東北隅 3 階建部分の矩計図となっていて、東面の地下から妻面までと、北面の地下から屋上腰壁にいたる断面詳細、窓開口回りが描かれている。

「第拾七號」と「第拾八號」は共に階段を 1/20 で示す。「第拾七號」は明治 42 年 1 月 20 日に完成したもので、大階段が描かれ、平面、断面、正面、背面各図の他に側板と段板の 1/2 の詳細図が掲載される。大階段については、明治 43 年 4 月 5 日に「第貳拾八號」が示され、若干のデザイン変更がなされ、更に同年 12 月 9 日に「第貳拾八號(改)」において、再変更を行った。「第拾八號」には書庫鉄製階段、教員閲覧室前木製階段と小屋改口鉄製階段が描かれる。「第拾九號」には、竪樋及び排水桝の詳細図と下水排水経路が記されている。「第貳拾號」では、鉄梁と木梁の断面図及び詳細図が描かれ、木梁鉄梁の連結方法や鉄梁を煉瓦壁に積込む方法を見取図にして示し、各階天井の 1/5 詳細図も掲載する。

「第貳拾壹號」から「第貳拾三號」には、広間尖塔アーチ積み、1 階玄関硝子戸、広間・記念室の両開戸、その他各室出入口の唐戸や硝子戸、2 階閲覧室扉回りの面・立面・断面図等が 1/20 で描かれる。「第貳拾四號」には、地下と 3 階の出入口扉の平・立・断面図と、1 階広間の大理石腰羽目、2 階閲覧室書籍貸出台の立面図が示される。「当初 40」図は番号表示の記載はないが、表題に「Key Drawing for Wraught Steel Sashes and frames for the Windows A,B and C of Keio Library」と記され、大閲覧室と大階段室で使用する 3 種のスチールサッシが描かれる。

「第貳拾五號」には附属便所と廊下を描く。明治 42 年 1 月 18 日の日付が記されていて、建物の平・立・断面図と壁体矩計、建具詳細図が示されている。これとは別に日付不明の「附属便所及廊下」と記された「当初 29」図も存在する。これは平面プランを変えずに煉瓦造陸屋根形式のものを木造切妻形式に変更したものと考えられる。「第貳拾六號」には、屋上喚起窓の平・立・断面図と、大棟飾りの立面・断面図、参考書室天井の立面・見上図を示す。「第貳拾九號」と記された図面は全部で 4 枚存在していて、すべて鉄骨トラスの詳細図が描かれる。それぞれ、参枚ノ内第壹、第壹図ノ内訂正、参枚ノ内第貳、参枚ノ内第参とあって、「第拾号」で示された鉄骨トラス組をより詳細に図示したものと考えられる。「第参拾號」は、1/20 の縮尺で広間尖塔アーチ積部分通路の平・立・断面と見上図を描く。

家具を描いた図面は「家具第壹號」から「第五號」と番号表示なしのものが 1 枚の合計 6 枚が存在する。「第壹號」は書棚詳細図、「第貳號」は貸出台、衝立 2 種、カード台、新着書籍棚、机、「第参號」は記念室の机と小椅子、長椅子、肘掛椅子、応接室の円テーブルと椅子、机と回転椅子、参考書室の円テーブルと椅子、「第四號」は各部屋窓内部の日覆設置用図面、「第五號」は各部屋に使用する 6 灯出・3 灯出・2 灯出のシャンデリア、パイプペンダント、シーリングライト、ブラケット、デスクスタンド等の照明器具が詳細に描かれている。「当初 48」図は記念室と応接室の窓掛装飾の正・側面図を示す。

「当初 49」図は表門の設計図で、大正 2 年 (1913)4 月 5 日の日付が入る。

「当初 50」図は八角塔内鉄製螺旋階段設計図で、大正 3 年 (1914)10 月 14 日の日付が入る。建物は既に完成していた時期の作図であり、階段は 1 階床面から 2 階床面まで設置する計画となっている。2 階床面から最上階の月波楼に至る階段を残置しながら新設する計画であったようだが、実現したか不明である。

(2) 仕様と形式

イ　基礎

建物全体に地階を設けたため、地面より地下部分を総掘りし、さらに布基礎と独立基礎部分を掘り下げ、割栗石を突き入れて地固めをし、幅 2 尺 5 寸から 8 尺、厚 3 尺のコンクリート層を打設した。この上に下部を根積煉瓦とした煉瓦壁を積上げる。

ロ　構造

壁体を煉瓦造とし、外壁に石材とテラコッタを交え、壁体上部の切妻部分の外壁には鉄筋コンクリート造を採用し化粧煉瓦を張り付けた。床組は書庫全体と１階の一部分を鉄筋コンクリート造とした他は、すべて木造とした。小屋組はすべて鉄骨造で組み上げ、中央のＬ型平面の陸屋根部分を銅板葺、他はスレート葺とした。

ハ　部屋配置と仕上

実施設計にともなう変更があったためか、当初設計図と史料12の『紀要』に記された平面図には若干の相違点が見られる。また、『紀要』に記された図面と本文との間にも部屋名称の違いが散見される。ここでは、図面を参照しつつ『紀要』の本文に記された内容を正として記述することとした。

地階　下駄傘置場、弁当室、湯呑所、製本室、新聞室、機関室、広間、通路、大階段室、小階段室を配する。地階南面の入口より入ったところを新聞室とし、その北面に一部を畳敷とした製本室を設ける。東側の中央広間を経て北側大階段の下に下駄傘置場を設置する。さらに地階中央広間を東に向うと通路を経由して東面入口に至る。通路南側と、東南の八角塔地下部分とに弁当室を設ける。通路の北面東寄りを湯呑所とし、部屋の北面に暖炉を設置し、周壁を釉薬白煉瓦張りとする。西寄りに小階段を設ける。湯呑所の北側には煉瓦壁を介して機関室を配する。床はすべてセメント塗、壁・天井は漆喰塗とする。

また、大階段室の西面北寄りに出入口を設け、木造渡り廊下の先端に便所を設ける。

1階　玄関、広間、大階段室、小階段室、応接室、雑誌室、教職員閲覧室、紀念室、事務室を配する。

南面中央部分に表昇降口を設け、室内側を玄関とする。石段を登ると、自在扉の先に広間が広がり、北面奥を大階段室とする。この二部屋はともに床面を英国ミントンホリンス社製の色煉瓦敷タイルを敷き込み、周囲を木造腰羽目張りとする。部屋境に２列８柱で構成される秩父産緑色大理石の３連アーチを架け渡し、二部屋間の見通しを可能としている。

大階段室の西壁面寄りに、彫塑家北村四海作の「てこな」の白大理石像を置く。大階段踊り場北面の大窓は、竣工時は普通板硝子張りとしたが、大正４年(1915)12月、和田英作原画による小川三知製作のステンドグラスが嵌め込まれた。

広間の東面南寄りの硝子戸を介して雑誌室を配し、硝子棚付の雑誌台４個を備える。この部屋の東南に接した八角塔部分に教職員閲覧室を設け、円テーブルと机を備える。雑誌室の北面東寄りを応接室とし、円テーブルと皮張椅子、机と回転椅子を備え、天井に３灯出シャンデリアを２組設置し、窓にカーテンを掛け[註4]、床を絨毯敷きとする。西隣に小階段室を配し、館員専用の小階段を設け、通路部分をタイル張りとする。

大階段室の東隣を紀念室とする。東・北２面に窓を設け、防寒のため二重窓硝子とし、南面壁の中央に暖炉を設け、前飾に美濃赤坂産の大理石を使用する。向かい合わせの北面の中央には壁龕を設ける。壁に木造腰羽目を巡らし、床は壁際を寄木張とし、内側に絨毯を敷く。窓にカーテンを掛け、中央部分に角テーブルと皮張椅子を、壁際に長椅子と肘掛椅子を具へ、隅飾棚及び花瓶台を置き、天井には２組のゴシツク式３灯出シャンデリアを吊下げる。

広間の西隣には南北外壁に跨る縦長の事務室を配する。東面中央部分で広間に向って受付口を置き、西面中央に書庫への出入口を設け、木製唐戸と鉄製防火戸を併設する。室内には書庫の１・２・３階各廊下に通じる通話機と電話室を設ける。

2階　大階段室、大閲覧室、八角塔特別室、東階段室、特別閲覧室を配する。

木造の踊り場付両返し大階段を登り、２階大階段室に至る。尖形アーチ状天井の中心に６灯の銀色シャンデリアを吊下げる。

南側は、中央の自在扉を介して、大閲覧室とする。大きさは、東西が66尺３寸３分、南北が43尺１寸３分で、東南隅は八角塔の一辺となるが、ほぼ長方形で、館内最大の部屋となる。周囲の壁を漆喰塗に仕上げ、木製腰羽目を廻らし、天井は木造額縁入板張とする。窓を南東北の３面に設け、採光通気を確保している。窓材はイギリス製で、ヘンリーホープ社製のスチー

表 2.1.1　室名比較対照表

当初設計図	図書館紀要 添付図面	図書館紀要 説明文	昭和 2 年 (1927) 改修工事図面	昭和 21 年 (1946) 改修工事図面	昭和 57 年 (1982) 改修工事図面	修理前
地下 1 階						
広間	広間	広間	広間	広間	ホール	ホール
物置	―	―	物置	物置	―	物置
大階段室	大階段室	中央階段室	大階段室	大階段室	大階段ホール	大階段室
通路	通路	通路	通路	―	廊下	廊下
弁当室	喫煙室	弁当室	弁当室	食堂	控室、ロッカー室	倉庫 (2)
(八角塔) 弁当室	弁当室	弁当室	弁当室	食堂	休憩室	書庫
湯呑所	小使室	湯呑所	湯呑室	湯呑所	監理室	倉庫 (1)
小階段室	小階段室	小階段室	小階段室	小階段室	小階段	階段室
機関室	機関室	機関室	機関室	機関室	展示書庫 1	書庫 (東)
予備室	製本室	製本室	予備室	予備室	展示書庫 2	考古学展示室
	新聞室	新聞室				
―	廊下	―	―	―	廊下	廊下
荷造場	倉庫	―	荷造場	荷造場	第 1 書庫 (北)	第 1 書庫 (北)
倉庫	倉庫	―	倉庫	倉庫	第 1 書庫 (南)	第 1 書庫 (南)
便所	便所	便所	便所	便所		
1 階						
昇降口	昇降口	昇降口	昇降口	昇降口	―	―
玄関	玄関	玄関	玄関	玄関	―	風除室
広間	広間	広間	広間	広間	エントランスホール	エントランスホール
大階段室	大階段室	大階段室	大階段室	大階段室	大階段	大階段室
紀念室	紀念室	紀念室	紀念室	紀念室	特別展示室	紀念室
予備室	予備室	応接室	予備室	予備室	前室	控室
小階段室	小階段室	小階段室	小階段室	小階段室	小階段	階段室
予備室	雑誌室	雑誌室	予備室	予備室	特別閲覧室 2	展示室
(八角塔) 予備室	教員読書室	教職員閲覧室	予備室	予備室	展示書庫 3	泉鏡花展示室
事務室	事務室	事務室	事務室	事務室	展示ホール	福澤研究センター事務室
廊下	廊下	廊下	廊下	―	廊下	廊下
(北) 書庫	(北) 書庫	(北) 書庫	(北) 書庫	(北) 書庫	第 1 書庫 (北)	貴重庫、収蔵室、作業室
(南) 書庫	(南) 書庫	(南) 辞書室、庫内閲覧室	(南) 書庫	(南) 書庫	第 1 書庫 (南)、資料室	資料室
2 階						
大階段室	大階段室	大階段室	大階段室	大階段室	大階段室	大階段室
裏階段室	東階段室	小階段室	裏階段室	裏階段室	中階段、前室	前室
教員閲覧室	特別閲覧室	特別閲覧室	特別閲覧室	特別閲覧室	小閲覧室	小会議室
閲覧室	大閲覧室	大閲覧室	大閲覧室	大閲覧室	大閲覧室	大会議室
露台	露台	露台	露台	露台	―	バルコニー
参考書室	八角塔特別室	八角塔特別室	八角塔特別室	物置	書庫	書庫
廊下	廊下	廊下	廊下	―	廊下	廊下
(北) 書庫	(北) 書庫	(北) 書庫	(北) 書庫	(北) 書庫	第一書庫 (北)	書庫 (北)
(南) 書庫	(南) 書庫	(南) 書庫	(南) 書庫	(南) 書庫	第一書庫 (南)	書庫 (南)
3 階						
裏階段室	北側階段室	―	裏階段室	裏階段室	中階段	
物置	物置	―	物置	物置	マシンハッチ	
予備室	予備室	予備室	特別閲覧室	予備室	機械室	
(八角塔) 予備室	月波楼	月波楼	月波楼	月波楼	―	
廊下	廊下	廊下	廊下	―	廊下	
(北) 書庫	(北) 書庫	(北) 書庫	(北) 書庫	(北) 書庫	第 1 書庫 (北)	
(南) 書庫	(南) 書庫	(南) 書庫	(南) 書庫	(南) 書庫	第 1 書庫 (南)	

ルサッシを取付ける。南面中央の大窓の外には露台を設け、1 階入口昇降口の屋根とする。室内には幅 3 尺 2 寸､長 15 尺と 7 尺 5 寸の 2 種の机 12 脚を並べる。西面中央に貸出台を設置し、左右に新着書籍棚を据え、貸出台の左右を囲み、少し隔てて左右に目録台を配置し、その前面に衝立を立てて閲覧席と隔離させる。貸出台背後の両開戸は、書庫 3 階の廊下に通じる出入口とし、貸出書籍はすべてここを経て貸出台に送られる。12 脚の机にはそれぞれ数個の卓上スタンドを設け、部屋中央部に 6 灯付の大シャンデリア 1 個と天井直付電灯 6 個のほかに、ブラツケツト電灯とガス灯を備える。

東南隅の階段を一段上がったところが八角塔特別室となり、皮張椅子 9 脚、円テーブル 1 脚、机 3 個を備える。

大閲覧室北面の東寄りの片開自在扉北側は、3 階に通じる東階段室となり、西面が大階段室、東面が特別閲覧室に通じる。東階段室は 3 階予備室に至る木造階段の在る部屋であり、特別閲覧室への通路と大閲覧室の通路を兼ね、閲覧者用の手洗器を備える。特別閲覧室の東・北面の窓には、紀念室と同じく二重窓硝子を入れ、大閲覧室と同形の机と椅子を設置する。また、南面に暖炉を設け、大理石製の前飾を置く。

3 階　東南部八角塔 3 階部分は 2 階八角塔特別室の上部吹抜となり、2 階から曲線形鉄階段で最上階に通じる。また、北東部の 3 階にも小部屋を設ける。

八角塔最上階は、周囲 6 面に窓を開き、円テーブルと椅子を備える。月波楼と名付け、机・椅子と茶器台を備え、接客室及び塾関係者等の談話室にあてる。東北隅の予備室は 2 階の特別閲覧室とほぼ同じ広さとし、同様の机と椅子を設置する。

書庫　図書館の西側に位置し、南北を桁行、東西を梁間とした矩形平面の建物を付設する形式とする。書庫は 4 階建で、地階と屋根裏に部屋を設ける。

地階より 4 階までは、南北中央部分の東西方向に約 7 尺幅の廊下を配して、南北に煉瓦造間仕切壁を積上げ、南北二方に長さ約 32 尺、幅約 21 尺の部屋を作り、各部屋に書籍を収容し、机を備え教職員閲覧の便に供する。床は鉄筋コンクリート造にタイル張りとし、廊下中央付近に鉄階段を設置し各階を繋ぐ。また、各階西端隅の床を穿ち書籍昇降機を設置する。外壁の窓や廊下境の出入口、事務室・大閲覧室等に通じる出入口にはすべて鉄製防火戸を設置する。

書架は東・西面壁付片面用が 2 列、両面用 6 列を窓と直角方向に配置し、約 2 尺 5 寸の通路幅を確保する。ただし、1 階南側の部屋を辞書室とし、大机 2 個を備え絨毯を敷き、教職員の書庫内閲覧室とする。ここはその後、書庫内の教員読書机が狭いということで、大正 5 年 (1916) に、玄関右にあった学生雑誌室を改造して教員閲覧室とした。

また、後日蔵書の増加に対応するため、中央廊下を西に延長し第 2・第 3 書庫を増設可能とした。

註

1 「資料編第 2 章 1 当初設計図他図面リスト」参照。

2 ここで使用する図面番号は今回の報告書執筆の際に仮に付したものである。

3 資料編「昭和 2 年改修工事図面リスト」の「昭和 2 年 12」図に示された図面がこの「第拾四號」に該当すると考えられる。この矩計には倉庫西側と事務室南面の断面と姿図が示される。

4 応接室の説明文には「純帳」とあり、「緞帳」と同意義か。また建設当初の紀念室の写真では、窓にカーテンが掛かり、木製ロットと持送り台座も写り、「当初 48」図の応接室窓掛装飾に描かれたものと類似する。
「第 4 章第 9 節 6 窓飾り及び日除け」参照。

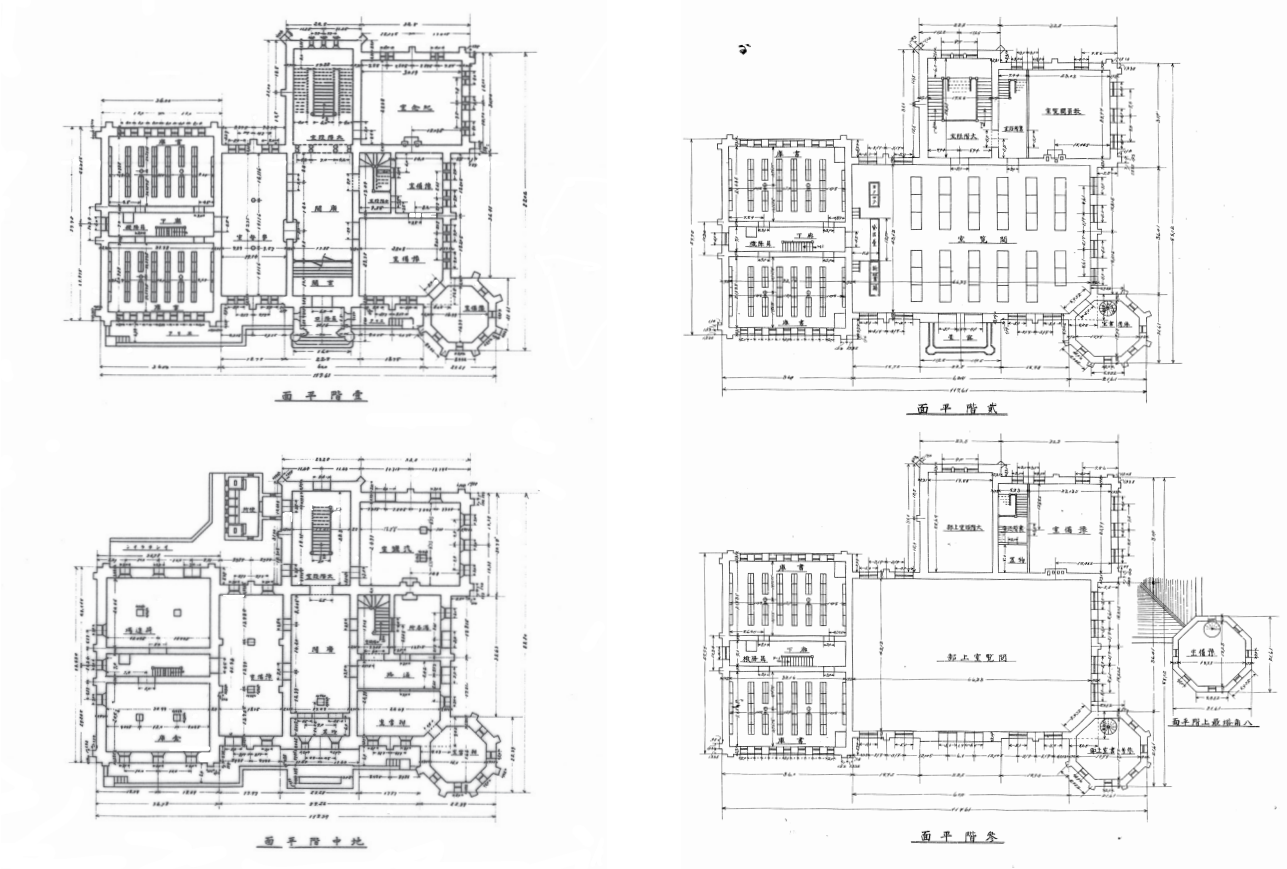


図 2.1.1　各階平面図　当初設計図『第壹號』・『第貳號』

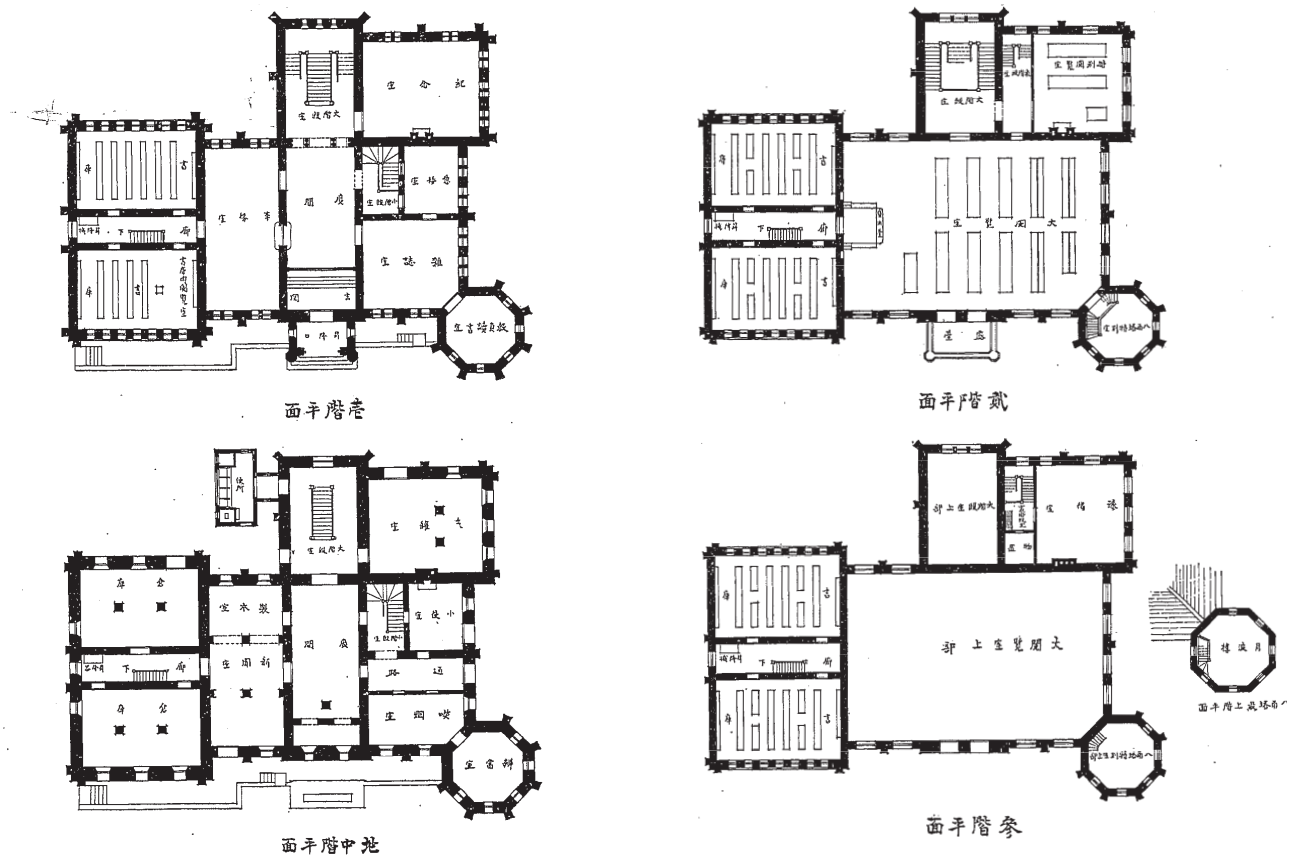


図 2.1.2　各階平面図　『慶應義塾創立五十年紀念圖書館紀要』記載

第 2 節　震災復旧工事

1　関東大震災による被害

大正 12 年 (1923)9 月 1 日に発生した関東大地震によって、図書館外壁煉瓦のいたるところにひび割れが発生し、建物全体が危険な状況となった。建物内部においても、漆喰壁の漆喰塗部分の多くが崩れ落ちてしまった。

震災後の写真には、その様子が生々しく写されている。古写真 115 と 118 は階段室北面外部を写したもので、妻壁と窓開口の間に大きなひび割れが発生し、笠石の踏止石が浮き上がってしまい、妻壁とともにいつ落下してもおかしくない状況になっている。また、窓開口の下方にも窓枠石材を貫通してひび割れが発生しており、化粧煉瓦が欠け落ちている様子が見て取れる。古写真 116 には八角塔の南西面が、117 には東北面が写る。南西面の 1 階部分のバットレスから窓上角部分にかけて大きなひび割れが見られ、東北面では八角塔と本体部分の入隅付近のロンバルディア帯から 2 階窓アーチ石にかけて化粧煉瓦と石が欠け落ち、その先のバットレス煉瓦にも欠失が見られる。古写真 124 は塾監局の破損状況を示したものであるが、バットレスの煉瓦一部が塊で欠落した様子がわかり、図書館の状況もこれに近いものであったと推察される。

古写真 130 は大階段北面のステンドグラス周りを写したもので、漆喰塗が崩れ落ちた状況がわかる。131 は八角塔 3 階内部を写したもので、階段手摺の奥の煉瓦壁入隅部分の煉瓦崩れ落ち、入隅の鉛直方向と水平方向に大きなひび割れが発生している。

2　震災復旧工事の経過

当時の様子と慶應義塾の対応については『慶応義塾図書館史』に詳しく記されている。

「大震災による建物の損害は約二十万円と見積られたが亀裂を生じたのみで倒壊に至らなかったので、その部分の応急措置で当座を弥縫することになった。十三年三月の評議員会で震災に因る建物応急仮修繕工事費四千三百五十円が可決され、十四年にかけて修覆が行われた。その間二つの予備室を閉鎖し、大閲覧室も三分の一が使用を禁ぜられた。前述したように地震による被害は建物の向って右側に被害が大きく、書庫及び書庫寄りの方は堅固であった。」とあるように、とりあえず応急修理を施し、修理中に詳細な破損調査を行ない、その結果、鉄骨補強を施すことで構造上の問題は解決できると結論付けられたようだ。

これとは別に、当時の慶應義塾では蔵書の増加とともに新書庫の増築が不可欠となっていた。「2.1.3 書庫」の項目で記したように、図書館建設計画のなかで、もともと図書館建設当初より、図書の増加とともに書庫を西側に拡張できるよう考慮されていた。建設当初は、西側に木造寄宿舎があり、北側には旧幼稚舎の木造建築が存在していたが、これらを取り払って第 2、第 3 の書庫を造ることを考えていたようだ。震災当時、木造寄宿舎は既に移転済みで、震災後一時的に仮教室が造られたが、いつでも撤去できる状況にあった。

書庫増築案には 2 案あって、第 1 案は鉄筋コンクリート造、タイル張り、4 階建て書庫に地下室と天井裏を設けたもので、外観はこれまでの書庫に合わせたものとするもの、第 2 案は鉄筋コンクリート 5 建てに地下室を設け、外形は予科校舎に合わせ、将来的に上部へ 2 層増築できる構造とするものであった。

結局第 1 案が採用されることとなり、仮校舎の建設、破損の甚大であった塾監局煉瓦館の取り壊し、演説館の稲荷山への移転、大講堂の修築完了と復旧工事が進捗し、現在の塾監局が完成したのが大正 15 年 (1926)9 月であった。

本館については、応急修理が済んでいたこともあって、書庫増築工事から着手することとなった。工事請負入札の結果、清水組が最低価格を提示し、設計者であった中條技師と協議の上、工事を任せることとなった。

書庫工事は、昭和 2 年 (1927)1 月 4 日に着工し、8 月 5 日に竣工した。建物はゴシック式鉄骨鉄筋コンクリート 4 階建て、地階と屋階を設け、建坪 53 坪、延坪約 268 坪であった。外観は既存の書庫に合わせ

たが、内部は廊下で小部屋に区切ることを止め、一層一室とし、屋根も鉄筋コンクリート造としてスレート葺を施した。

工事工程の詳細は不明であるが、残された古写真と併記された日付などからある程度の工程を知ることができる。1 月 21 日には地中の掘削が完了し、栗石の地固めが行われている[古写真 136]。引き続き、1 月 28 日には基礎鉄筋の配筋と型枠の組立てが進行中で[古写真 137]、2 月 2 日にコンクリート打設中となっている[古写真 139]。2 月 17 日は鉄骨柱の組立中で[古写真 140]、3 月 7 日には小屋組の鉄骨トラスまで組み上がっている[古写真 141]。4 月 8 日には 2 階の床スラブの配筋を施工中で[古写真 142]、翌日になると床スラブのコンクリートを打設している[古写真 143]。

引き続き本館の補修工事が行われることとなり、新書庫を一時本館の代用として使用することになった。また将来再増築する予定の第 3 書庫との連絡を考えて、各階の北面東寄りに出入口が設けられ、地階を閲覧者の出入口とした。地階に受付を置き、食堂、小使室、物置として使用した。閲覧者は旧書庫と新書庫の間に新設された鉄階段を昇降し、各階に出入りした。1 階に事務室があり、2・3 階を閲覧室とし、2 階閲覧室の壁際にカード目録があり、2 階階段の上りフロアに出納台があった。

撮影日は不明であるが、古写真 135 は八角塔の上部が切り取られた直後のものであり、昭和 2 年 1 月 28 日撮影と記された古写真 138 には、八角塔上部にトタン屋根が掛けられ、閲覧室東南部外壁の板張り養生も完了した様子が窺える。

本館の補修工事は同年 8 月 19 日に着手し、昭和 3 年 (1928)8 月 25 日に竣工した。記録写真によれば、昭和 2 年 11 月 28 日には、2 階大閲覧室と大階段室の部屋境の鉄骨組立柱や、大階段の鉄骨架構まで組み上がっている状況が写され[古写真 148]、翌年 3 年 2 月 28 日には、3 階特別閲覧室の床コンクリートを打設中であることがわかる[古写真 149]。

3　震災復旧後の仕様および形式

(1) 設計図

増築書庫の設計図を含めて、震災復旧工事に係わると考えられる図面は、「資料編第 2 章　1　当初設計図他図面リスト」に記したように、19 枚存在する。「慶應義塾紀念図書館増築書庫設計図」の表題で、「番外 1」と「1」から「7」まで算用数字の番号が付された一連のものが 8 枚、図書館改修設計図が「第壹號図」から「第十號図」まで漢数字が記されたものと「第 11 號図」と合わせて 11 枚となる。これらは、すべての図面に日付が付されている。

増築書庫設計図はすべて大正 15 年 10 月 21 日の日付が記されている。「番外 1」は配置図であり、構内建物の配置が描かれ、増築書庫の位置を示す。「1」で各階平面と西・南・北立面図、梁間・桁行断面図を、「2」で各階構造平面図、東西南北面鉄骨立面図、梁間鉄骨断面図、屋根鉄骨伏図、小屋組鉄骨詳細図、床構造詳細図を示している。「3」と「4」には、鉄骨組の矩計図と詳細図が描かれ、「3」に梁間断面内部の鉄骨架構詳細と同位置の壁体及び床スラブの鉄筋コンクリート配筋図と、外壁桁行部分の開口詳細と鉄骨架構詳細、「4」に南妻面鉄骨架構詳細、北妻開口詳細が示される。「5」は当初図書館との納まり詳細と、渡り廊下・階段部分の構造詳細図を描いている。「6」は南面壁面の矩計と鉄筋コンクリート断面詳細、南立面詳細と北面開口、北面扉開口部分の断面詳細と北立面詳細図が、「7」は西側面窓廻りの立面と断面詳細と、階段廻りの詳細が描かれている。

一方、図書館改修設計図は、煙突廻り配筋図を除いてすべて大正 14 年 (1925) 中に描かれたもので、増築書庫設計図作成前にすべての作図が完了していたことがわかる。

「第壹號図」には 2 階・3 階・屋根裏の梁伏図に新規に設置する鉄骨柱と鉄骨梁位置を平面的に示し、各面の姿図も表示して補強材の全容がわかるようにしている。「第貳號図」から「第六號図」は「第壹號図」で示した柱と梁の詳細を示したものとなっている。「第貳號図」は、南面玄関西隣の間と北面 3 階建部分の鉄骨矩計・詳細と壁体部分の石材と鉄筋コン

クリートの納まりが示されている。「第参號図」は、大階段東・北・西面の鉄骨詳細図と八角塔屋根裏スラブの配筋図が描かれる。「第四號図」には、大閲覧室西半の床梁詳細図に、八角塔部分の鉄骨柱及び柱間の詳細と鉄筋コンクリート壁断面詳細に床梁詳細図を加えたものが描かれる。「第五號図」には、大閲覧室と北東 3 階建接合部分の柱梁詳細とその他柱梁部分の詳細と、新設する各鉄骨柱の型鋼組合せ方と鉄筋コンクリート柱の配筋が描かれ、柱製作に必要なすべての鉄筋とアングルの寸法が示されている。「第六號図」には屋根裏床と各床梁の詳細図が描かれる。「第七號図」に地階・1 階平面図、「第八號図」に 2 階･3 階平面図、「第九號図」に東立面図、「第十號図」に正面図がそれぞれ描かれる。「第 11 號図」は昭和 2 年 10 月 7 日の作製で、各階における煙突廻りの配筋が描かれている。

また、これらとは別に表題に「改修工事　昭和 2 年」と記された合計 44 枚の設計図面も存在する[註1]。先に示した「慶應義塾紀念図書館改修設計図」の 11 枚が、主として構造部分の改修設計を示したのに対し、この 45 枚は、雑作と仕上の改修方法を示したものと考えられる。このうち 14 枚は当初設計図と同一かトレースしたもの[註2]であることから、震災復旧工事では、平面計画や外装仕上げにおいて、概ね当初の形式を踏襲したようだ。

図面に通し番号はなく、必要に応じて図面を寄せ集めた感じがする。

図 1　右下に「慶應義塾紀念圖書館平面図」と表示されたもので、1 枚に地階・1 階・2 階・3 階の各平面図が描かれる。本館の西隣りに第 2 図書館も描かれる。

図 2 ～ 4　地階、1 階、2 階、3 階平面図で、室名・寸法等が記される。

図 5　本館 2 階平面図。書庫書棚配置と大閲覧室机配置を記す。

図 6　本館の書庫を除いた 2 階平面と第二書庫の平面図。大閲覧室と特別閲覧室の机配置と、第二書庫の書棚配置が記される。

図 7　南立面図。当初の姿を踏襲しつつ、玄関扉を新設し、八角塔の風見形状を変えている。

図 8　小屋組寸法を記してある。

図 9　1 階・2 階・3 階・八角塔各階の天井見上図。

図 10　木床となる各階各部屋の床平面を示す。根太割りは 1 尺 5 寸間隔とし、すべて米松のフローリング張りとしている。

図 11　床伏図。大正 14 年に描かれた「第壹號図」に倣ったもの。

図 12　当初図面で欠失している「第拾四號」をトレースしたものと考えられる。1 階事務室と 2 階大閲覧室南面の矩計と姿図、倉庫西面矩計が描かれる。

図 13　壁体頂部とロンバルジア帯が描かれるが、詳細不鮮明。

図 14　上記同様、壁体上部が記載される。左端の但書にある「四十三年十月廿一日 T.S.」の署名が曽禰達蔵とすれば、当初の実施設計図の一部と考えられる。

図 15　大階段室天井蛇腹（廻縁 2 種・縦横縁 2 種）の原寸図が描かれる。

図 16　2 階特別閲覧室と裏階段室、3 階特別閲覧室と裏階段室の天井蛇腹（電気木座と中心飾り周囲縁・廻縁 3 種）の原寸図。

図 17　1 階予備室と八角塔予備室の天井蛇腹 2 種の原寸図。

図 18　1 階大階段室と小階段室廻縁天井蛇腹の原寸図。

図 19　1 階小予備室の天井蛇腹 2 種、事務室天井蛇腹（中心飾り・縦横縁・廻縁）の原寸図。

図 20　1 階紀念室天井蛇腹（廻縁･周囲縁 2 種）、玄関（中心飾り縁・廻縁）の原寸図。

図 21　1 階広間天井蛇腹（廻縁・周囲縁）、昇降口天井蛇腹（廻縁・中心飾り縁・縦横縁）の原寸図。

図 22　1 階広間から 2 階大閲覧室にかけて、天井と床の納まりや仕上材の詳細図が描かれる。

図 23　部位は不明であるが、天井下地の原寸図。

図 24　軒樋原寸図。

図 25　大階段室東・西壁空気抜き新設図。壁部分の断面図と平・立面図が描かれる。

図 26　大階段の鉄梁詳細図 4 個所と大階段室の梁配置図 2 面が描かれる。

図 27　紀念室床・書庫床・大階段室と広間床の断面詳細図。すべてがコンクリート造床で、床下端から 1

寸付近にエキスパンデットメタルが敷設されている。建設当初の実施設計図の一部か。

図 28　2 階特別閲覧室掲示板詳細図。南面暖炉大理石天板の上方に木枠を設置。

図 29　八角塔階段納まり図として、地階・1 階・中 2 階・2 階の断面図、1 階・中 2 階・2 階平面と中 2 階床梁伏図、2 階木版取付展開図が描かれる。

図 30　階段室窓上ステンシル詳細図。　（高村）

(2) 仕様と形式

イ　基礎

旧本館及び第一書庫の基礎は、震災の影響を受けなかった。

新設する第二書庫は、当初建設された書庫と同じく、建物全体に地階を設けたため、地面より地下部分を総堀りし、布基礎部分を掘り下げ、割栗石を突き入れて地固めをした。

煉瓦基礎とコンクリートフーチングで建てられた第一書庫の基礎底よりも 68mm 程度深く基礎を設けている。布基礎の幅は、梁芯から 4 尺 5 寸と 3 尺の 2 通りあり、基礎梁せいは 5 尺、布基礎部分の厚さは 2 尺となっている。主筋や補強筋は丸鋼で構成されており、基礎コンクリートの天端に鉄骨の柱脚が取り付けられ、鉄骨鉄筋コンクリートの柱が立ち上がる。

ロ　構造

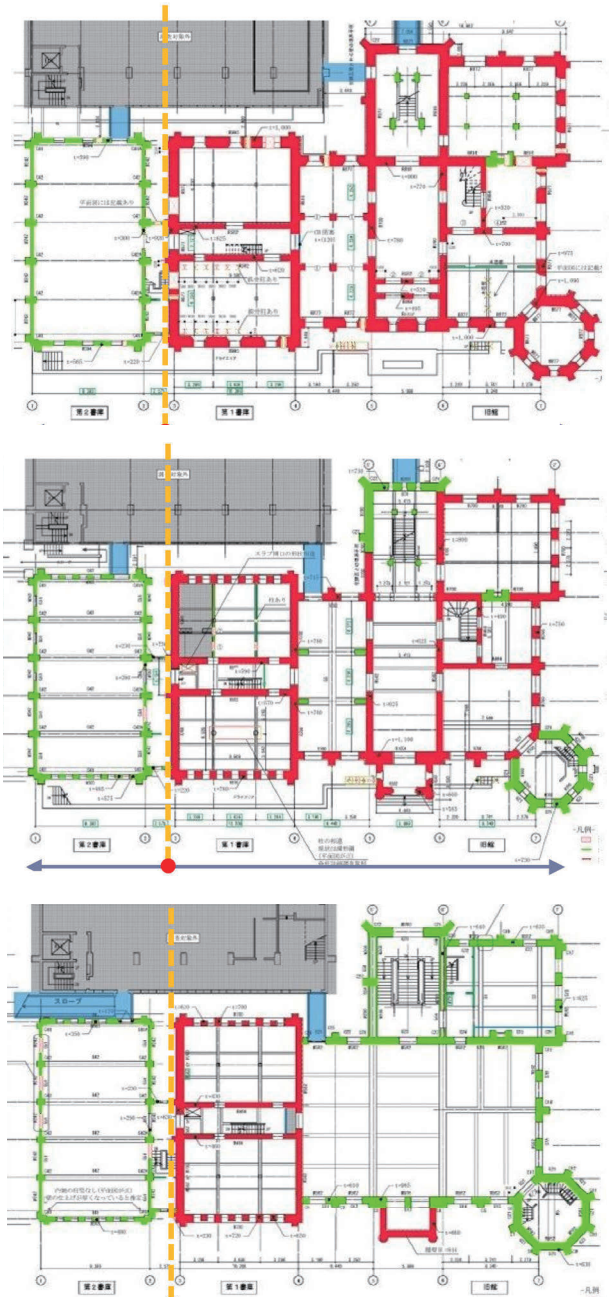
旧本館が震災の影響を受け、部分的に被災したことで、新しく隣に第二書庫が新設された。第二書庫の柱、梁は鉄骨鉄筋コンクリートで構成され、壁は鉄筋コンクリートで丸鋼にて配筋されている。柱脚は、ベースプレートに山形鋼材及び板材をリベットにて接合された形式となっている。柱は、溝形鋼材に斜材板をリベットにて接合されたラチス形式となっている。

桁行方向の梁は、溝形鋼材の梁にリベット接合、梁間方向は、上下 2 組の山形鋼材を用いた弦材に、外壁側はラチス状に板材を組み合わせたラチス形式、室内側は格子状に板材を組み合せた格子梁形式となっている。梁端部部分及び柱との接合部分には、板材にて補強がなされている。無開口の壁の内部には、山形鋼材によるブレースが埋め込まれている。

第二書庫の屋根は、鉄筋コンクリートで構成されており、コンクリート内に鉄骨トラスの上弦材が内蔵されている。

震災によって旧本館の 2 階大会議室及び八角棟が、大きな空間を有していたために、煉瓦壁が崩れてしまったため、崩れた部分を鉄骨鉄筋コンクリート躯体で復旧している。

旧本館 2 階大会議室の床受け梁部分から鉄骨鉄筋



第2書庫：
竣工 1927 年
（SRC 造（緑）＋
鉄骨トラス屋根

旧館・第1書庫：
竣工 1912 年（煉瓦造（赤）で鉄骨トラス屋根）
改築 1928 年（関東大震災において被災した一部を RC 造（緑）で改築）

図 2.2.1　各階構造種別

コンクリートにて改修され、床及び屋根裏面は鉄筋コンクリート床にて復旧されている。建物の東南にある八角棟は、１階部分は震災で崩れなかったが、復旧の際に１階受け梁部分から鉄骨鉄筋コンクリート躯体としている。復旧により、旧本館は煉瓦と鉄骨鉄筋コンクリートの混合構造となっている。

復旧された旧本館の柱、梁は、鉄骨鉄筋コンクリートで構成され、形式は、第二書庫と同様とした。（篠田）

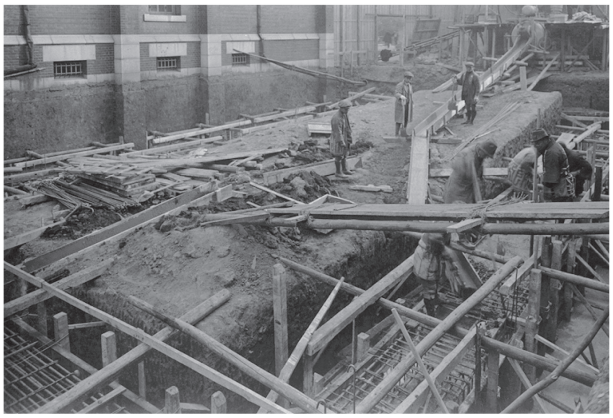


写真 2.2.1　第二書庫基礎工事

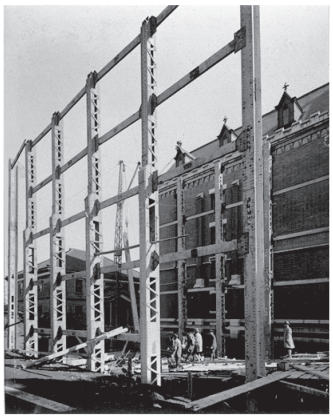


写真 2.2.2　第二書庫柱建方

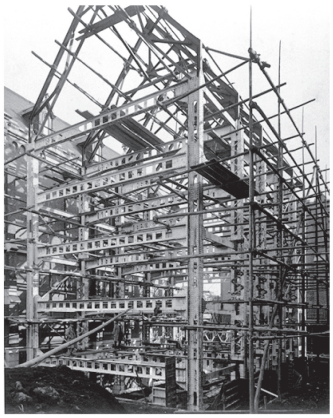


写真 2.2.3　第二書庫鉄骨工事

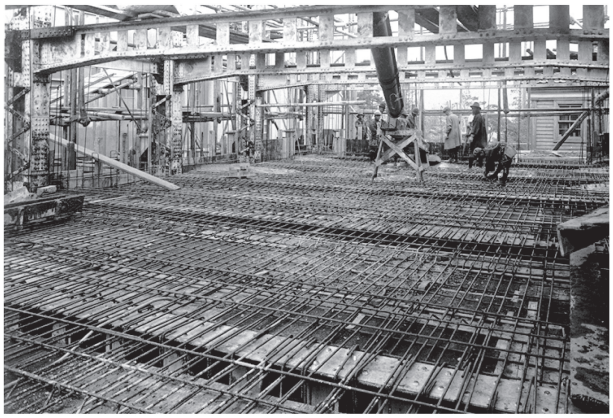


写真 2.2.4　第二書庫床コンクリート打設

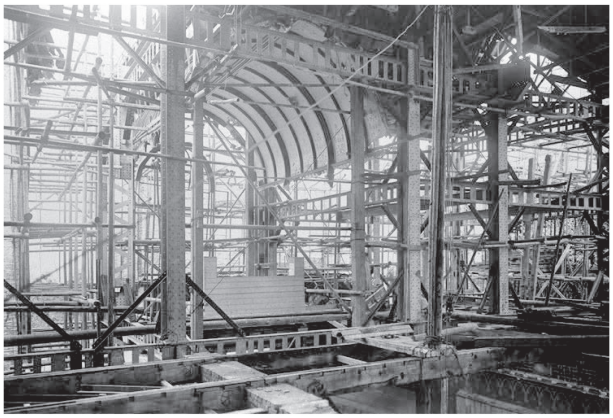


写真 2.2.5　旧館改修　大会議室鉄骨建方

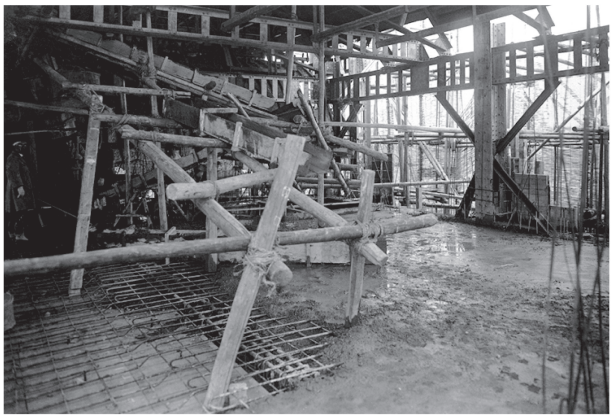


写真 2.2.6　第二書庫床コンクリート打設

ハ　部屋配置と仕上

復旧にあたり、部屋配置に若干の変更が加えられた。閲覧室を広くするために出納台の両側にあった目録箱を予備室に移し、そのあとを新聞雑誌と特別書の閲覧場所に改めた。こうすることで、閲覧室の静寂を保つことができ、座席も 24 席増加させることができた。また、階段にコルク粉末を加工したものを敷き込んで消音効果を高めたり、便所を汲取り式から水洗式に改めた。

建築当初と比較して、部屋配置に大きな変更はなかったと考える。改修工事の図 2 から 4 を参照しながら変更点を拾い出してみる。

地階　地階南面の入口奥は、新聞室を予備室に改めた。東側に広間が接続し、北側に大階段室、東側に通路を経由して東面入口に至る。通路南側と、東南の八角塔地下部分の弁当室は当初のままとする。通路の北面東寄りを湯呑所とし、部屋の北面に暖炉を設置、西寄りを小階段室、北側に機関室を配するのは当初と同じ。

大階段室の西面北寄りに渡り廊下を接続し、先端に便所を設ける。

1 階　南面中央部分に昇降口を設け、玄関境に両開戸を新設する。玄関北側に広間、奥つき当たり部分を大階段室とする。大階段踊り場北面の大窓はステンドグラスを嵌め込む。

広間の東面南寄りと東南の八角塔部分を予備室に変更した。旧応接室も予備室に変更し、西隣の小階段室は当初のままとする。

大階段室の東隣は紀念室を残置している。北面中央の壁龕や、壁の木造腰羽目、床仕上は当初通りとし、天井は在来に倣って蛇腹を引き直し、シャンデリアは再使用したと考えらえる。ただし、南面中央の暖炉上の鏡を撤去し掲示板を設置した。

広間西隣の事務室もほぼ残置しており、天井蛇腹も当初に倣って塗直している。

2 階　全ての部屋はほぼ当初の形式を踏襲する形で復旧されている。

大階段室南側を大閲覧室とし、南面中央の外に露

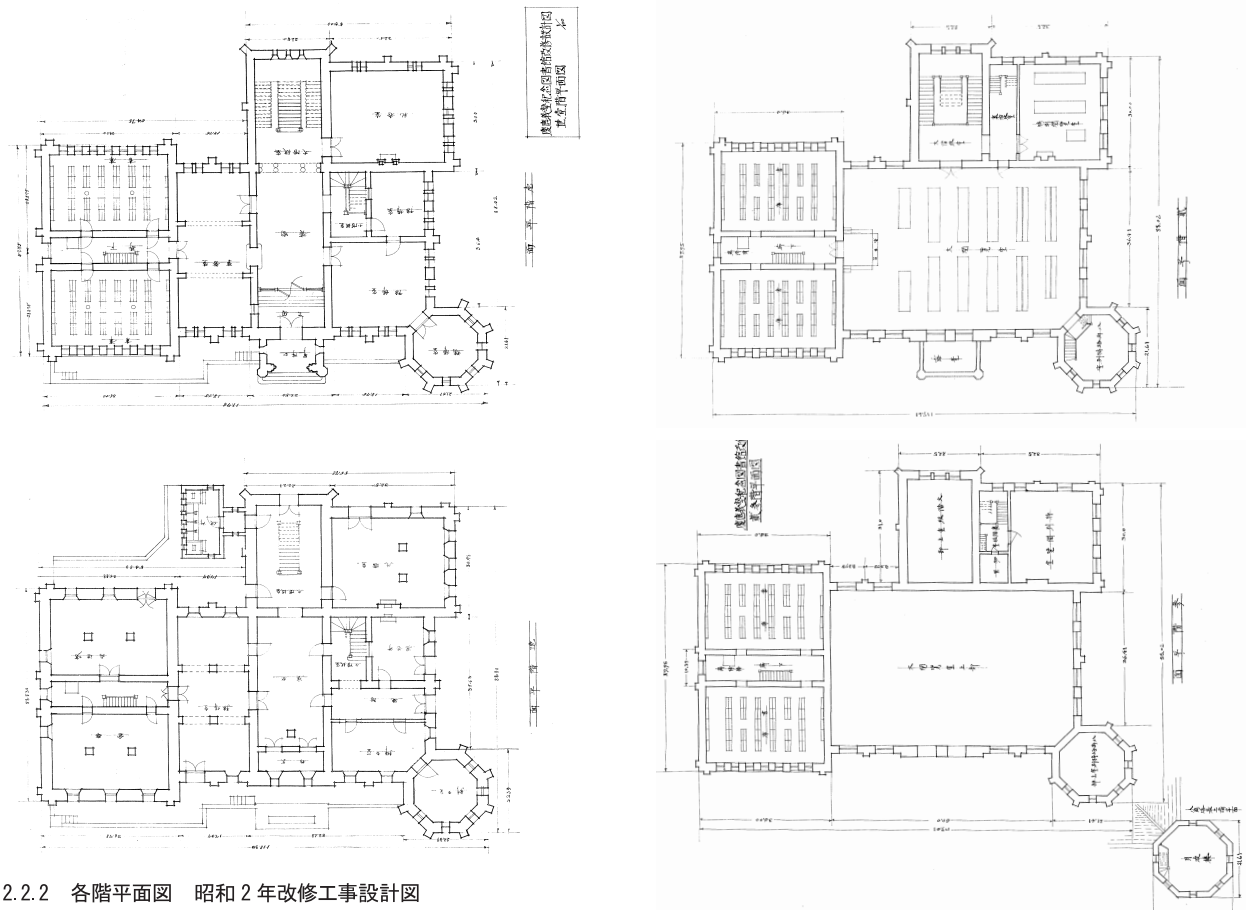


図 2.2.2　各階平面図　昭和 2 年改修工事設計図

台を設け、東南隅が八角塔特別室となる。

大階段室東寄りは 3 階に通じる東階段室となり、東奥が特別閲覧室となる。

3 階　東南部八角塔 3 階部分は 2 階八角塔特別室の上部吹抜となり、1 階から新設された内周部階段で最上階に通じる。また、北東部 3 階の特別閲覧室も踏襲した。

書庫　震災の影響はなく、ほぼ建設当初の姿を残す。地階部分は廊下をはさんで倉庫と荷造場とし、1 階から 4 階は、中廊下の両部屋をすべて書庫とする。廊下西端隅に書籍昇降機を設置する。

註

1　44 枚中、註 2 に列挙した図面以外のリストを「資料編第 2 章 2 昭和 2 年改修工事図面リスト」に示す。

2　第壹號、第貳號、第参號、第四號、第五號、第六號、第七號、第拾號、第拾號の写し（第拾號の表示なし）、第拾壹號、第拾参號（当初図面はもと 1 枚であったものを上下 2 枚に切断してある）、第拾六號、第拾七號、第貳拾號。

第 3 節　戦災復旧工事

1　戦災による被害

昭和 20 年 (1945) 5 月 26 日の空襲で図書館は大きな被害を被った。ここに、当時の様子を『慶応義塾図書館史』から要約転載する。

「三田本塾空襲戦災状況報告」によると、23 日夜から翌日朝にかけての空襲で、一部の木造建物が焼失してしまった。25 日午後 10 時 10 分に警戒警報が発せられ、10 分後空襲警報となった。空襲で被弾した建物の飛び火が図書館中央屋上北側の屋根に落ち、これを夜半の 12 時頃に消し止めることができた。ところが、日が変わった 26 日 0 時 20 分頃、第 2 次爆撃が始まり、無数の焼夷弾が撒布され、木造の教職員クラブ・食堂・調理場が火炎に包まれ、煉瓦造の大講堂・図書館八角塔・書庫の屋根から火を噴き出し、大講堂は全焼してしまい、図書館は屋根裏の発火場所だけで焼失を食い止めることができた。しかし、再び残り火が燃え広がり、建物中央部の火は徐々に下に及び、28 日正午まで燃え続け、書庫を除いて、閲覧室・事務関係の諸室・地下室すべてを燃え尽くした。

書庫の火は屋根裏で食い止められ、新書庫と旧書庫の 4 階から地階に至る図書は無事であった。けれども、屋根が焼失してしまったため、トタンで上部を遮蔽したものの、屋根裏スラブに溜まった雨水がコンクリートや煉瓦のひび割れ部分から浸入し、階下へ漏れ出す状況であった。

空襲直後に撮影された古写真 177 から 191 を観察すると、火災による被災の傾向が以下の通りであったことがわかる。

・焼け残った部材は、外壁に使用されていた煉瓦、石、テラコッタ、コンクリートと屋根骨組の鉄骨等の不燃材である。

・可燃物である屋根野地板や床材等の木材はすべて焼失した。

・屋根葺材に使用していたスレートは不燃材であったが、屋根下地が焼失した際にすべて落下した。

・鉄筋コンクリート躯体に張り付けたタイルの一

部が剥落した。

・石材表面に、火災による熱のため欠けてしまった個所がある。

・小屋組の鉄骨は燃え残っているが、熱による変形が甚だしい。

・窓ガラスの損傷が甚だしく、ほとんどが欠落した。

2　戦災復旧工事の経過

戦災で屋根を失った書庫は漏水が激しくなるばかりで、早急に対策を立てる必要があった。学校当局は、財政困難にもかかわらず、費用 86 万 6 千円でもって、書庫の屋根復旧工事に取り組んだ。工事は昭和 20 年 10 月に着手し、翌年 2 月に完了している。設計は斎藤誠二、工事を株式会社中野組が請負った。しかし、これでも雨漏りは止まらず、図書館全体の復旧工事を行わなければ水の浸入を止めることはできなかった。

昭和 21 年 (1946) 10 月に評議員選挙が行われ、22 年 (1947) 1 月から本格的な復興事業に取組むことになり、まず最初に図書館の復旧工事を行うことになった。9 月の評議員会で図書館の復元工事が決定され、主体工事費 500 万円で、23 年 (1948) 8 月竣工の見込のもとに、安藤組が請負うこととなった。12 月 26 日に建築許可がおり、29 日に上棟式が行われ工事に着手したものの、戦後のインフレの真直中であり、資材物資不足もあって、工事は遅延を重ね、落成式が挙行されたのは昭和 24 年 (1949) 5 月 5 日であった。

設計者は斎藤誠二、主体工事を安藤組、電気を東光電気、衛生関係を城口研究所、閲覧什器を佐藤商店、装飾什器を高島屋が施工した。主体工事・設備・資材・什器工事費を合算した工事精算額は、当初予算の 5 割 5 分増しの約 1,690 万円であった。

写真 2.3.1　空襲直後　南面 (古写真 178)

写真 2.3.2　焼損の甚だしい大階段室小屋組・窓 (古写真 190)

3　戦災復旧後の仕様および形式

(1) 設計図

戦災復旧工事に係わる図面は、「資料編第 3 章　3 昭和 22 年改修工事図面リストに記したように、26 枚存在する。

図面には通し番号が付されているように見えるが、一部に判別不能な数字があるため、番号を特定することができない。図面の種類は、仕様書 1 枚、平面図 4 枚、屋根伏図 1 枚、断面図 1 枚、天井見上図 2 枚、床組伏図 1 枚、小屋・屋根伏図 1 枚、トラス詳細図 11 枚、新設コンクリート柱詳細図 1 枚、新設床配筋図 1 枚、大階段詳細図 1 枚、不明 1 枚である。

図 1 は図面タイトルが「慶應義塾圖書館改修工事・仕様梗概」とあって、修理方針等が示されている。

図 2 ～ 5 の各階平面図を見る限り、震災復旧工事の平面プランをほぼ踏襲していることがわかる。相違点は、八角塔で 1 階から 2 階に上がる階段を新設したことと、便所を北側に一部拡張した程度である。図 9 に描かれた天井見上図によると、2 階大閲覧室と八角塔の天井の形状が変更されている。この時の最も大きな変更点は、図 11 ～ 21 に示されているように、鉄骨トラスを木トラスに変更した点である。これと同時に、図 6 に示されるように、屋根を瓦棒付き亜鉛引鉄板葺に変更している。　　(高村)

(2) 仕様と形式

イ　基礎

旧本館・第一書庫及び第二書庫の基礎は、戦災の影響を受けなかった。

ロ　構造

旧本館の屋根は、戦災の影響を受け、鉄骨トラスが熱による変形及び損傷が生じたため、木トラス構造に変更された。ただし、階段室の上のトラスは、一部の鉄骨トラスが残存する。木トラス接合部は、木プレートと通しボルトにて固定され、その四周は釘が打たれている。

木材と木材を繋ぎとめるために打ち込む９φの鎹（かすがい）が、各接合部にみられる。

第一書庫の屋根は、熱によって鉄骨トラスが湾曲したままであったが、元の屋根勾配を確保できるように、屋根面に合うように木材を使用して嵩上げし、木製屋根下地を復旧している。

第二書庫は屋根がコンクリートであるため、戦災の影響を受けなかった。（篠田）

ハ　部屋配置と仕上

部屋配置に大きな変更はなかったようだ。

火災による被害は甚大であったに違いなく、書庫を除いた本館各部屋の床・壁・天井仕上材は、すべてやり直したと推察される。

図８によると、天井仕上は、平の部分で漆喰塗厚６分以上としている。また、彫刻・中心飾り・蛇腹等は石膏で製作し、真鍮木捻と鉄線で下地に固定するよう記されている。（高村）

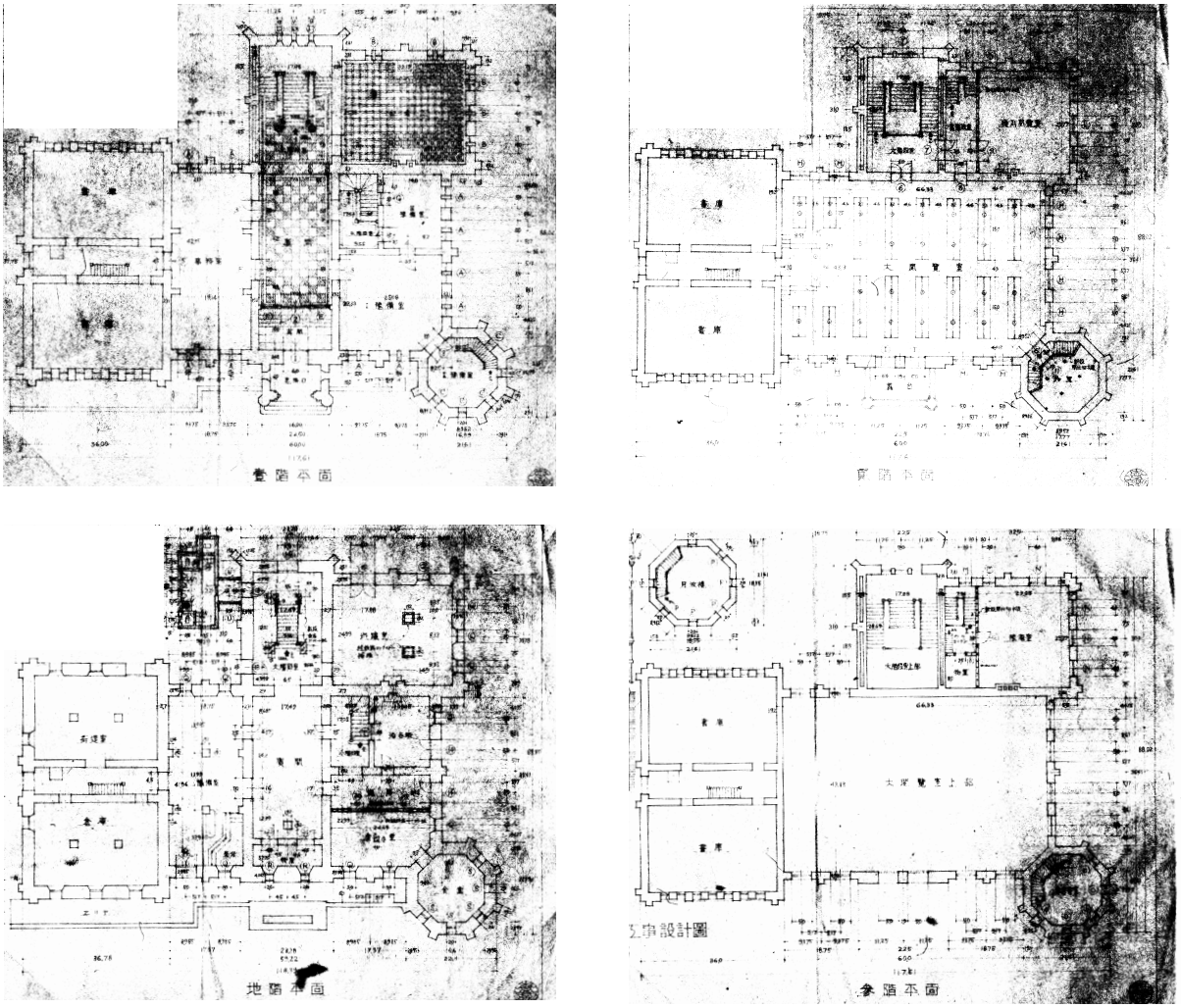


図 2.3.1　昭和 22 年改修工事設計図　各階平面図

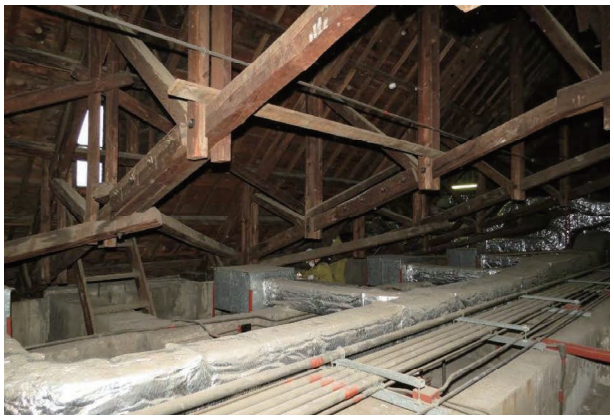


写真 2.3.3　旧館屋根裏木トラス 1

写真 2.3.4　旧館屋根裏木トラス 2

写真 2.3.5　旧館階段上鉄骨トラス

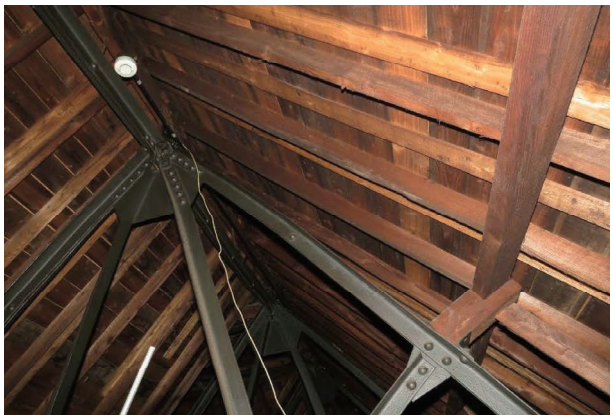


写真 2.3.6　第一書庫鉄骨トラス

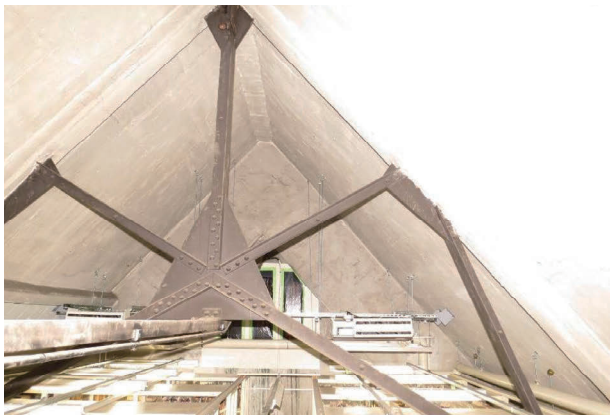


写真 2.3.7　第二書庫鉄骨トラス

第４節　その後の改変

１　第三書庫増築時以降の改修

第一書庫・第二書庫の北側に第三書庫が、旧図書館の大階段室北側に別棟（便所・機械室）が、それぞれ昭和36（1961）年竣工に増築され、その後渡り廊下Ｅが増築された。

設計図書の一部である「慶應義塾三田図書館増築工事概要書」（昭和36年３月９日、三菱地所株式会社第二建築部）によれば、第三書庫は地下１階、地上３階、塔屋２階の鉄筋コンクリート造で、地下１階と１階にそれぞれ中間階（地下１階-2、１階-2）が存在しており、実質的には地下２層・地上４層となっている。外壁は煉瓦タイル貼り及び人造石洗出目地切仕上、竪樋は銅板製とあり、並列する第二書庫との調和が意識されている。

以下に、第三書庫増築時の図書館の改変個所について述べる。

(1) 渡り廊下Ａ設置に伴う改変

第二書庫と第三書庫との間の１階・１階-2・２階・３階の４層に渡り廊下Ａが設置された。第二書庫北側外壁の東寄り窓２個所を拡張する形で出入口開口を形成し、扉を設置している。その際、渡り廊下Ｂ外壁との間にエキスパンションジョイントを取り付けるため、外壁に穴開け等がなされた。また、第二書庫と第三書庫との間に設備配管を通すための開口も設けられた。

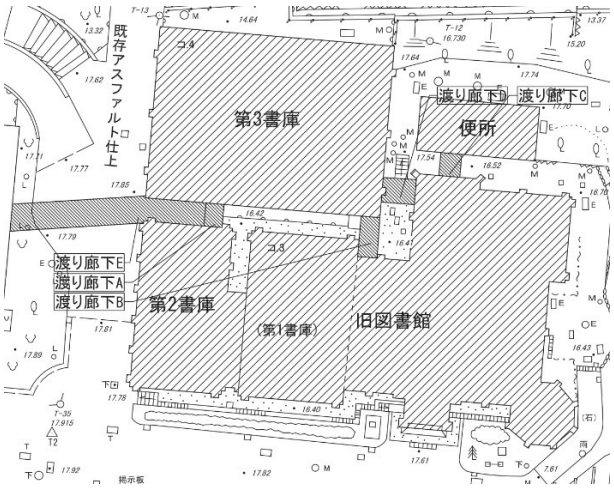


図 2.4.1　第三書庫・渡り廊下位置図

一方、第三書庫南西角の出入口に西側構内通路から上がるための階段が設置され、接する第二書庫北面外壁の一部が改変された。

(2) 渡り廊下Ｂ設置に伴う改変

本館と第三書庫との間の１階・２階の２層にわたり渡り廊下Ｂが設置された。いずれも既存の窓下を拡張する形で出入口開口を形成し、扉を設置している。その際、渡り廊下Ｂ外壁との間にエキスパンションジョイントを取り付けるため、外壁に穴開け等がなされた。

(3) 渡り廊下Ｃ設置に伴う改変

地下１階大階段室と別棟（便所・機械室）との間に渡り廊下Ｃが設置された。その際、当初からの出入口を利用しているため、開口を拡張する改変はなされていないが、渡り廊下Ｃ外壁との間にエキスパンションジョイントを取り付けるため、外壁に穴開け等がなされた。

(4) 渡り廊下Ｄ設置に伴う改変

地下１階大階段室と第三書庫との間に渡り廊下Ｄが設置された。その際、当初の別棟便所への開口が利用されたので開口は当初のままであるが、渡り廊下Ｃ外壁との間にエキスパンションジョイントを取り付けるため、外壁に穴開け等がなされた。

(5) 渡り廊下Ｅ設置に伴う改変

第三書庫増築時以降に、研究室棟と渡り廊下Ａの２階とをつなぐ渡り廊下Ｅが設置された。この工事に伴い渡り廊下が接する第二書庫の外壁の一部が改変された。（野村）

２　昭和57年の改修工事

(1) 改修工事の概要

改修工事は昭和57年（1982）に実施された。工事の設計図面である「慶應義塾図書館改修工事　昭和57年１月　槇総合計画事務所」によると、改修範囲を本館・第一書庫、第二書庫、第三書庫とし、主として、

本館・第一書庫と第ニ書庫の屋根葺替、外装・内装の改修・補修、建具の取替が行われた。

以下に本館・第一書庫の改修工事内容について述べる。

(2) 屋根

瓦棒付き亜鉛引鉄板葺を撤去し、現状の野地板上に 12 ㎜の耐水合板か 18 ㎜の野地板を張り、アスファルトフェルトとアスファルトルーフィングを張り重ね、一部を 0.4 ㎜厚の銅板平葺とし、大部分を厚 5 ㎜の天然スレート葺とした。

八角塔の避雷針を撤去し風見付きのフィニアルを新設した。また、既設のフィニアル 5 個はクリーニングを施し、書庫棟北端部には厚 1.2 ㎜の銅板を使って新設した。

竪樋は 19 個所を人工緑青仕上のものを新設し、8 個所でケレンの上オイルペイント塗とした。

この他、軒樋を撤去し、新材に取替えた。

(3) 外装

外壁・窓部分は全てケレン・清掃をし、錆止塗装の上にオイルペイント塗とした。

(4) 床

地下 1 階　ホール、大階段室、展示書庫 2 のモルタル床仕上と展示書庫 1 の寄木張りを撤去し、下地モルタル補修を行いＰタイル張り。

1 階　エントランスホールと大階段室は既存のテラゾーブロックの清掃のみ。展示ホールは既存寄木張りをサンダー掛けしオイルステイン塗にウレタン樹

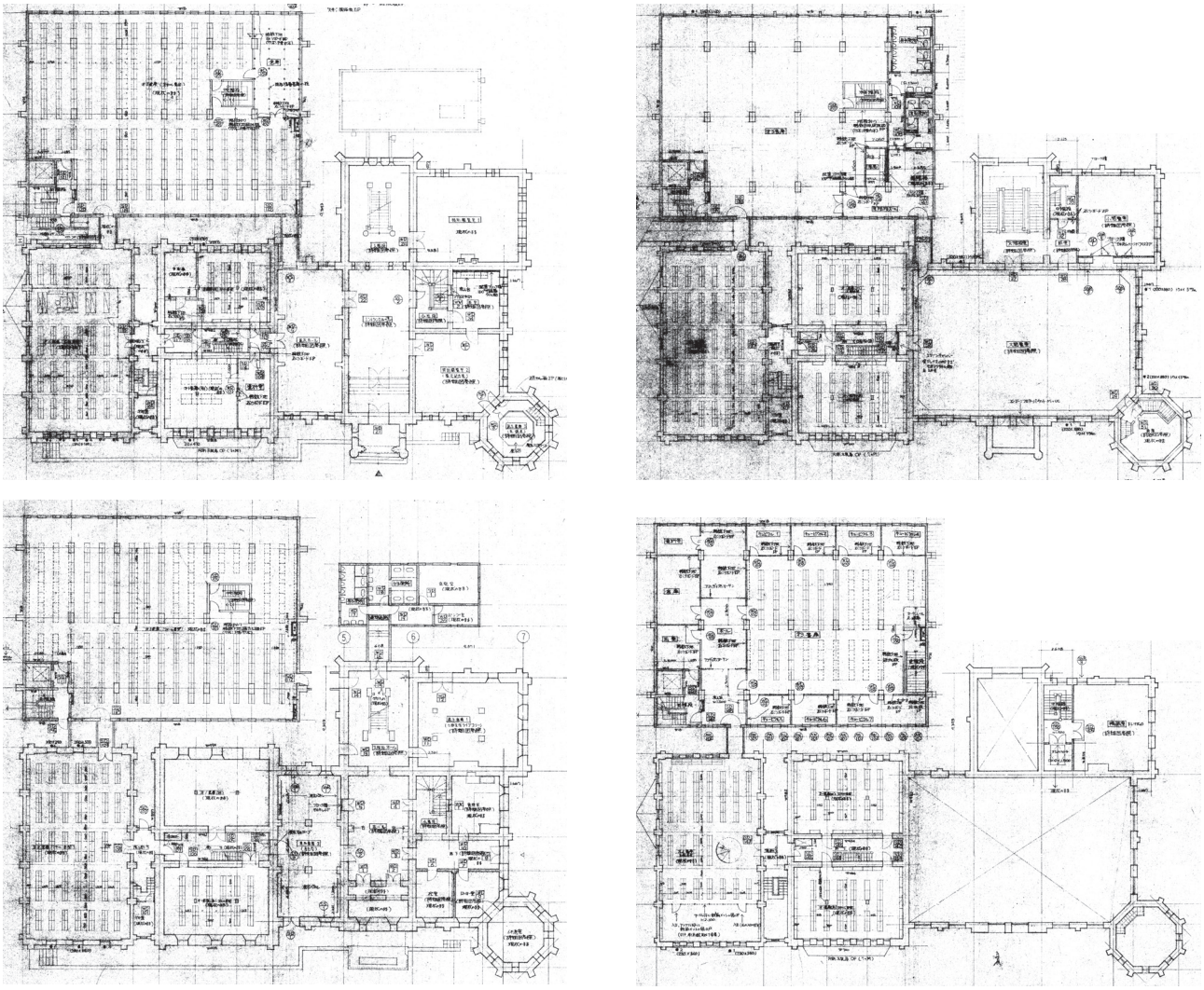


図 2.4.2　昭和 57 年改修工事設計図　各階平面図

脂ワニス塗。特別展示室２の縁甲板と展示書庫３のフローリングブロックを撤去し、寄木張り。

２階　大閲覧室はフローリングブロックを撤去し、絨毯敷、ボーダーを寄木張り。小閲覧室もフローリングブロックを撤去し､絨毯敷。大階段室は絨毯敷替え。

３階　機械室のＰタイルを撤去し、シート防水の上にシンダーコンクリート鏝押さえ。

(5) 壁

壁仕上のほとんどは漆喰塗にペンキを塗り重ねたものであった。既存の漆喰塗を残した部屋は、漆喰塗補修を行い水性エマルションペイント塗としている。

変更を加えた部屋では、地下１階ホールをリシン掻落し、２階大閲覧室をクロス貼り、３階機械室をグラスクロス貼りとした。

(6) 天井

地下１階の各部屋は漆喰塗にペンキを塗り重ねとしていたものを、漆喰塗部分を補修し水性エマルションペイント塗とした。

１階・２階の各部屋は、大階段室の漆喰塗を除いて、ベニヤ張りにペンキ塗りとしていた。既存のまま残置した天井は下地補修をして再塗装とした。大階段室は漆喰補修サンダー掛けの上に漆喰塗を行った。

１階展示ホールと２階小閲覧室は石膏ボードに水性エマルジョンペイント塗とし、大閲覧室は岩綿吸音板に水性エマルジョンペイント塗とした。

(7) 建具

書庫の廊下境開口で使用していた木製扉を撤去し、鉄扉だけとした。また木製扉を撤去しスチールサッシに造り変えたものもあった。　（高村）